

「3回のワークショップ、ご苦労様でした！」 ファシリテータより

柏市の新中央図書館への市民参加ワークショップの3回が終了しました。参加された皆様、ご苦労様でした。柏市には図書館を愛している方が本当に多いのだなぁと感じることの出来たワークショップです。準備をされる行政への要望も多く、まだまだ言いたいことがたくさんある様に見受けました。おおむね、声の大きい方々は、言いたいことを言い続けられた3回の集まりだったと思いますが、言いたいことをじっと控えて、参加されていた方々も多かった様に思います。

「有言実行」という言葉があります。反対に「無言実行」ということもあります。これからは、市民の自主、自立的（自律的）な活動が期待される時期を迎えます。言いたいことを言い続けた方も、じっとこれからの図書館を考え続けた方も、ここでの出会いを大切に、新しい図書館を誕生させるために不可欠な市民としての大きな力を果たしていただきたいと念じています。

「事務局からのごあいさつ」

昨年度は、新中央図書館整備基本構想の策定に当たって、新中央図書館のコンセプトや整備方針、運営について、市民の皆さんやワークショップに参加された方々の、多様なご意見を基本構想に反映させていただきました。

今年度のワークショップは、新中央図書館整備基本計画の策定に当たって、図書館を整備し、運営していくために、市民と行政がそれぞれ何をすべきか、その可能性などについて、話し合っていました。

休日の貴重な時間にも係らず3回のワークショップへのご参加、ほんとうにありがとうございました。皆様の真しな声を活かせるように新中央図書館の整備を推進して行きたいと考えております。



市民ワークショップ参加者の記念の一枚

事務局・連絡先

柏市教育委員会 生涯学習部教育総務課
Tel: 04-7191-7389/Fax: 04-7190-0892
発行日: 平成20年2月22日

柏市 新中央図書館
平成19年度 市民ワークショップかわらばん



“いっぱいやり隊！”通信

Vol.3

平成19年度 市民ワークショップ

「開館までの間に市民ができることを考えよう！」



集まってくださった市民のみなさん

1月20日（日）、第3回目の柏市新中央図書館整備ワークショップが開催されました。よく晴れた気持ちのいいお天気の中、15人のメンバーが集いました。基本計画を策定する今年は、サービスや施設、運営について、より具体的な方針を決めていきます。

そこで、第1回、第2回のワークショップではそれぞれ、市民が図書館の運営に参画するために、行政や図書館と、どのような関係を築くべきかを考えてきました。今回は「開館までの間に市民がやるべきことの道標」を考えました。また、今回は「社団法人日本図書館協会」理事・事務局次長の常世田良さんをゲストに迎え、公共図書館の可能性と課題について、お話をいただきました。

第3回 やることメニュー

- 9:00 ～ 開会の挨拶
- 9:10 ～ 事例報告
「最近の図書館の動向」
- 9:50 ～ 質疑応答
- 10:10 ～ 休憩
- 10:20 ～ 新中央図書館の説明
- 11:10 ～ グループワーク
開館までの間に市民ができることを考えよう
- 11:50 ～ グループ発表
- 12:10 ～ 本日のまとめ
- 12:15 ～ 閉会の挨拶
- 12:20 終了

今回は、3回にわたって開催するワークショップの最終回。右が当日のやることメニューです。

前回の内容を確認した後は、常世田さんに「公共図書館の可能性と課題」についてお話をいただきました。浦安市立図書館長として先進的なサービスに取り組んだ生の声ということもあり、みなさん熱心に耳を傾けていました。お話が終わった後の質疑応答では多くの方が積極的に質問していました。

お話の後は、3グループに分かれてグループディスカッションを行いました。市民が開館までの間にやるべきことについて、具体的な方針を考えました。

◆講師の紹介

常世田 良（社団法人 日本図書館協会 理事・事務局次長）
1983（昭和58）年3月 浦安市採用、図書館へ配属
1996（平成8）年4月 同図書館長
2004（平成16）年4月 同教育委員会生涯学習部次長
2005（平成17）年4月より現職

◆社団法人 日本図書館協会の紹介

図書館事業を通じ、日本文化の発展に貢献することを目的とする文部科学省所管の公益法人。



『課題』を解決する図書館 —公共図書館の可能性と課題—

『社団法人 日本図書館協会』理事・事務局次長 常世田良さん

1. 現在、求められている図書館の役割

現在の図書館は、圖書の貸出しに加え、市民が抱える課題を解決するために必要な情報を提供することが求められています。それゆえ、一定の情報と規模を有する図書館が必要となります。その理由としては、次の2つの背景があります。1つ目は、娯楽物の多様化です。現在は、テレビゲームやインターネットなど、人々が楽しむためのツールが沢山あります。圖書の貸出しだけでは、市民は利用してくれません。2つ目は、社会環境の変化です。現在は、個々人の自立が求められる時代です。人々は直面した課題に対し、自ら責任を持って判断する必要があります。このように市民が積極的に足を運びたくなる図書館となるためには、家庭や医療、法律など、市民が抱える様々な課題を解決するための手助けとなる施設を目指す必要があります。

2. 日本の公共図書館の現状

日本の公共図書館は、他の先進諸国と比較して、大きく遅れをとっています。例えば、アメリカでは、図書館内に医療専門の司書や法律相談に対応できる専門スタッフを配置しています。利用者は、こうした専門家に自らが抱える課題について相談できます。また、図書館に対する予算の配分についても、他の先進諸国に比べて少ないと言わざるを得ません。アメリカは、人口が日本の約2倍であるにも関わらず、図書館予算は、日本の約5〜6倍費やしていると言われています。こうした日本の公共図書館の遅れの背景には、情報の重要性に対する認識の欠如が挙げられます。近年、情報の重要性が増しているにも関わらず、日本はその対策が遅れているため、情報拠点である図書館の重点強化に至っていません。

3. 図書館の重要性

図書館界は、運営経費の削減など、冬の時代と言われていますが、ここ10年間で約700館の図書館が建設されていることから、需要は非常に大きいと言えます。このように図書館は、公共施設の中で最も市民需要の高い施設と言えます。

また、図書館が教育に与える影響の大きさも無視できません。現在、OECD（経済開発協力機構）の「生徒の学習到達度調査」で3年連続1位を記録しているフィンランドでは、その成功要因として、「図書館を充実させたこと」を挙げています。フィンランドの授業時間は、G7（先進7か国）と比較しても短いと言われています。放課後は、図書館や地域で児童の学習をサポートしています。このように図書館が教育に与える影響は多大なものがあり、その重要性を認識する必要があります。



4. 市民（ボランティア）の役割

日本では、行政が業務全般を行い、余った業務をボランティアが行うという形態になっています。一方、アメリカでは、地域の人々が中心となって行政を担う文化が育っています。日本で言うならば、「お祭りの役員」のような役割であり、市民が行政全体のコーディネートにまで責任を持って携わっています。そのため、アメリカでは、市民ができることは市民が行い、専門的なことを行政が行うという仕組みが出来上がっています。つまり、行政の「お手伝い」ではなく、主人なのです。



ワークショップの内容振り返り

第1回（10月7日）

「やりたいメニュー」をやれるための仕組みを考えよう

- ・自己紹介
- ・ワークショップの趣旨説明
- ・グループワーク・発表

第2回（11月3日）

「市民がやり続ける」ための仕組みを考えよう

- ・藤田さん（かしわインフォメーションセンター）のお話
- ・グループワーク・発表

第3回（1月20日）

開館までの期間に「市民がやるべきこと」を考えよう

- ・常世田さん（日本図書館協会）のお話
- ・グループワーク・発表

参加者からの質問に対して常世田さんが答えてくれました

Q：柏には16の分館という貴重な財産があるが、本館と分館どちらに重点を置くべきと考えるか。

A：限られた資金や土地の中で整備するのであれば、本館に重点を置くべきであると考えます。その理由として、市民の課題解決に役立つ情報を提供する場が求められているためです。例えば、病気になれば会社や保険、家族に関する問題が生じる。こうした複合的な課題を解決するための情報を提供できるのは、図書館において他にない。複合的な情報を提供するためには、一定規模の施設が必要であり、中央館の充実が求められる。高齢者や児童が通えないという問題が生じるが、循環バスを運行させるなど、知恵を絞ることで対応できると考える。

Q：アメリカ等の図書館では、運営は誰が行っているのか。

A：専門のスタッフがやっている。日ごろから読書をよくされる市民の方や、各分野の専門家も良書を選ぶ目を持っているが、図書館に森羅万象の情報を集めるためには、各分野の専門家ではなく、図書館の蔵書構成に則して選書を行う司書の存在が不可欠である。

Q：図書館にはやはり専門性を有するスタッフが必要であると考えがいかがか。

A：同感である。一般的に、専門のスタッフを配置するとコストが増加すると考えられているが、これは誤りである。図書館運営の専門性のないスタッフが非効率な運営を行うよりも、専門性を有するスタッフが少数精鋭で運営したほうが、人件費は削減される。また、同一の人員構成ならば、利益分がないだけ、委託より直営のほうが安価だ。

グループワークの成果

■平成20年度準備活動への要望（グループ1）

- ・市民との対話の場の継続。
- ・情報の公開、現状（決まったこと、制約条件）の報告。
- ・市民も責任を持って関わる。行政と市民が意思・意見交換を行い、実行へ移す。
- ・しかるべき人を館長及び準備委員に選ぶ。
- ・委員を途中で変えない！責任と熱意を持って図書館を作る。

■OPEN までにできる活動は？（グループ2）

【全体の流れ】

- ① 新中央図書館の在り方について考える。新中央図書館はどのような施設を目指すべきか。ボランティア活動はどのように関わることが可能か。新中央図書館の在り方について、市民の意見を反映させる。
- ② ボランティアワークショップを継続し、その後、準備部会を設立する。
- ③ 準備段階でボランティアをきちんと養成する。
- ④ 準備委員会でボランティア活動について、具体的に検討する。個々のボランティアの要望等は、準備委員会で検討する。設計段階で市民の意見を取り入れる。

【要望】

- ・新しい図書館運営に十分な知識と経験のある人をコンサルタントした上で設計主を募集する。
- ・新中央図書館の館長になるべき人には、建設の段階から関わってほしい。
- ・準備委員会に図書館の専門家と住民の代表を入れてほしい。

■新中央図書館について（グループ3）

【ハード面について】

- ・設計段階から必要な施設（障がい者、高齢者の安全確保など）の検討を行う。
- ・建物の概要を市民に示し、意見を求める。
- ・良い図書館事例を参考にする。
- ・館長、図書館職員の地位向上と熱意ある人を常駐させる。
- ・拡大図書作成場所を設置する。

【ソフト面について】

- ・館長は、構想段階から参加する。
- ・市民に現在の問題点を聞く。
- ・ボランティア活動を継続的に行う。
- ・専門の職員を配置する。



「グループ1
活動状況」



「グループ2
活動状況」



「グループ3
活動状況」

